

学部留学生の学習・研究活動のための日本語能力（1）  
—留学生に配慮した大学学部教学体制の整備に向けて—

山本 富美子

立命館アジア太平洋大学

[fyf07752@apu.ac.jp](mailto:fyf07752@apu.ac.jp)

<概要>

1. 日本の大学における学部教育の現状

（先行研究より）

日本の大学の学部教育は一般に日本人学生を対象とした教学体制であるため、学部留学生は、文科系・理科系ともに、一般に学習・研究活動で高度な日本語能力が要求されている。

2. 社会科学系専門講義科目で求められている日本語能力

（APUの社会科学系専門講義58科目の調査より）

ゼミ等での発表・討論能力、またインターンシップ・就職面接等での対話能力に代表される「発話技能」が強く求められているが、その前提条件として、高度な専門語彙を含む文献を読み、講義を聞いて理解する高度な「読解・聴解技能」が求められている。そのため、アカデミックジャパニーズの教育では、高度な専門語彙の教育が、日本語教育の困難点であり、要であると、多くの教員が認識している。

3. 日本語能力試験2級程度の留学生受け入れのための大学学部教学体制の整備

日本語能力が低くとも日本の大学で学びたいという意欲の高い留学生を受け入れるためには、日本語教育体制だけではなく、大学全体の学部教育体制を整える必要がある。日本語ゼロの学生も入学する立命館アジア太平洋大学の過去3年間を振り返り、その問題点、改善点について検討し、日本語能力が2級程度でも大学の学部教育を受けられるような教学体制について考える。

# 学部留学生の学習・研究活動に必要とされる日本語能力（２） —「アカデミック・ジャパニーズ」に使用される語彙の特徴分析より—

山本 富美子

立命館アジア太平洋大学

[fy07752@apu.ac.jp](mailto:fy07752@apu.ac.jp)

<概要>

## 1. 「専門語彙の困難さ」に対する認識と「専門語彙の実際の用法」とのズレ

(アンケート調査結果と専門語彙の実際の用法例より考察)

専門語彙は社会科学系分野であっても、その下位分野間で異なる。また、一般に日常的には使用されない漢語とカタカナ語が多く、日本人にとっても難解であるという意識が強い。そのため、語学教育に関するアンケート調査では、日本人、留学生に関わらず、専門語彙の困難さは最も強く主張される傾向にある。

しかし、実際に専門用語が講義や文献等で使用される時は、何らかのメタ言語が使用されており、それが文章・談話の全体的理解を助けている。例えば、講義などでは、教員自身が難解だと意識しているキーワード的な専門用語は必ずといっていいほど、その用語の簡単な説明、あるいは言い換え表現がなされている。しかも、その際に使われる語彙は、だいたい2～3級程度の語彙である。文献の場合も講義などの音声資料ほどではないが、そのようなメタ言語の使用が認められる上に、文献の読解の場合は、2級程度の日本語能力があれば辞書を引いて調べることも可能である。一般に、このような専門語彙の実際の用法に対する認識が低いため、アカデミックジャパニーズの教育では「専門語彙の難解さ」だけが必要以上に意識され、前面に出てしまうきらいがある。

## 2. 「アカデミックジャパニーズ」に使用される語彙の計量的特徴分析

(日本語能力試験(1級)、日本留学試験、講義、講演、対談、研究発表、『国境を越えて』の談話・文章に使用される語彙の級別分類より)

- ①1級、級外の語彙は、延べ語彙数、異なり語彙数ともに少ない。
- ②4級の基本語彙が延べ語彙数の過半数を占めている。
- ③4級3級の語彙には、機能文法語彙が大半を占め、大意の把握に役立っている。
- ④2級の語彙は延べ語彙数、異なり語彙数ともに最も多く、キーポイントの意味理解に主要な役割を果たしている。

## 3. 日本留学試験で測定すべき「アカデミックジャパニーズ」のための日本語能力とは

- ①2～4級までの基本的な語彙の知識、基本的な機能文法・文型の知識とその運用能力
- ②聴解の前提条件となる日本語の音韻の弁別能力  
(特に、日本語の音韻体系習得が困難な中国語系・ベトナム語話者などに対して)
- ③専門的語彙等、使用頻度の高くない1級、級外の語彙が使用される環境、およびメタ言語に関する知識とその運用能力
- ④コンテンツに関する知識と言語技能とを有機的に統合する能力